

Abstract

ボスニア・ヘルツェゴヴィナの平和構築再考
—— Dayton 和平合意 25 年後の教訓

長 有紀枝 (立教大学 教授)

紛争終結から四半世紀、国際社会が和平合意の締結とその後の平和構築活動に大きく関与したボスニア・ヘルツェゴヴィナの事例は「持続的な平和」のモデルケースあるいは成功例として語られてしかるべきはずのものである。しかし、近年「形を変えた戦争」が進行しているともいわれ、現在ボスニア情勢は戦後最悪とまで評されている。ではなぜ、このような事態に陥ったのか。本稿では、「形を変えた戦争」を可能にしたのは Dayton 合意そのものである、という立場に立ち、Dayton 和平合意の中に内在し、武力を使用しない「形を変えた紛争」を可能に、または、武力を使用せずとも、民族的な戦争は継続しうることを可能にした枠組み・仕掛けとはどのようなもので、どのような経緯で作られたのか。「持続的な平和」決議で重視された視点の内、紛争の根本原因への対処、現地社会のオーナーシップ、すべての構成員のニーズに配慮する包括性を手掛かりに考察していく。